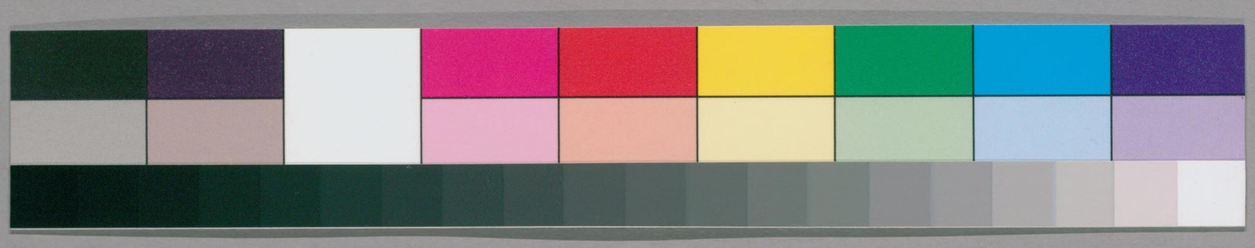
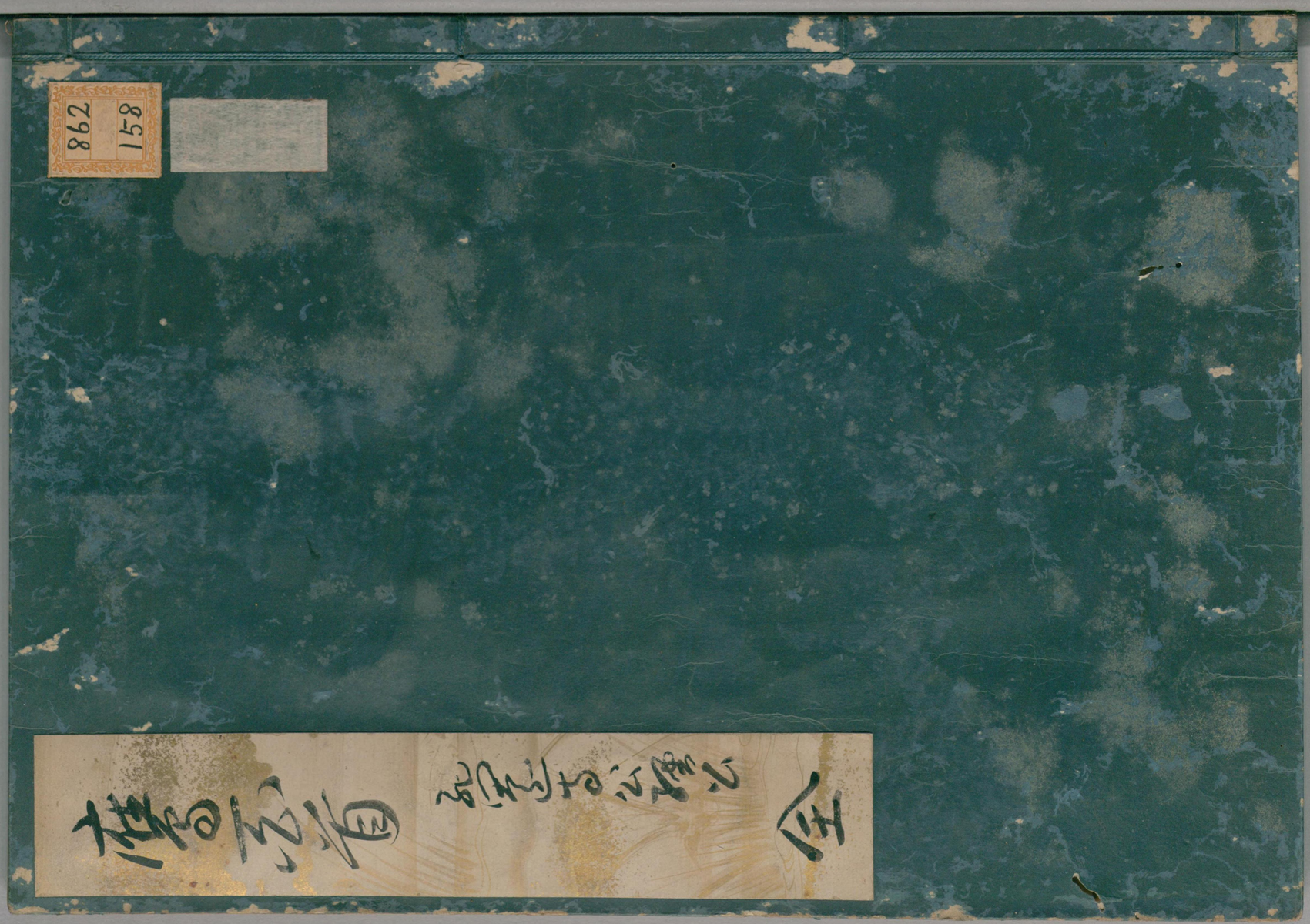




ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158

国立国会図書館　　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158

ガラス使用

862-158

鷹百首

後西園寺入道前太政官實兼公

西園寺相國公 經公

鷹山にあさりすとの志むくれ世に流ふべきにはれりけぬる

あさりとは食物を求覓と一切人に高に通ふこと

我身と流ふ事の鷹の本為をはくゝり置て此れ世には立まふ

流ふ事といふ二疲之志をくゝ追落されてそこひ事なる之但

一度追落すをも云追とも せむるとも申こと

いつくに雲のさてまれ詠をはちて如何のゝ此世にあるをかくさゝ

狩の祠をよせたる之

あらしかし鷹の目は物の鳥物ハ都(てイ)ゝ数物ハ特さ為のいひしさハ

何らしかしとはあらしと云也之れ有ましと云也

国立国会図書館 タイトル『鷹百首』 請求記号 862-158
ガラス使用

世中は色しきりて色しきりて雪はれたれひきくらぬ色よりはさよ
色しきりとは絶緒みしかくて枝さぬを云之色よりはくて捨
切ぬ世を喰るに凡へをのちさは二十朝之但当流は二十朝之
三十里山かりを出ぬと人をつれて朝夕たてぬ宿れはふりを
狩くらしてはなまくさはるをさまりしと云之家賀りして
いつも楽をたてかぬまは狩に出て山に舎まりと人を
つれよく云義之宿（トマリ）山イニ出沢云り
もふ雪を来につれふとり狩人の拘邪をふはつり家のうち
は雪とは大かた雪詞には喰鳥の事之又狩夢を
吹てよ里に来にかくまて宣（ハフ）ふまもあり夢根各無し
拘邪とは貴子（セコ）も雪狩も来り雪をつれふせぬまは

ものおしと云しかて狩の人数出たて狩に見を忘れ
雪ありとしへも雪に驚て立故之哥のまたこは実形を
よせて詠之
雪かりもおりひ設ぬりおもはさまは流ふ西なきに我身ひとりは
身を忘れは流まるふさぬ狩の雪流をたまて世には光ぬ
狩の雪イ世をはイ世をもイ
さむきまに我をも似るかことさむ大さへまさ身ひをもる
かことさむとは大のうこやむ之大の如まあるぬのこ
鉢ぐろに兎は以雪のこひさかれにせしはむしなりけり
鉢袋に兎のうち雪はこひを付る事むしはたつり
雪をさらする事なく実なれ此ゆへに形を結て者に世之

とハ鳥をこれよりも鎮袋の裝束ますと
こゝ山の巖とふたりのまゝとうさぬかさぬりの名をたりけり
米山ハ交野の内乃別所之志り句よりせてますかきね
とは谷ゝ鳥立てむりひの山よりにるをたりを巖を
おはれハ絶内ハこちまく一文字よむりひの山よ飛て
鳥ゝ石をゝ也山のきりさりたりハ鳥の有るこゝ切るを
くまして鳥をふりて故之山巖を一文字よ切ゝまゝとうさ
の様ゝ卜之
法ゝ通ハ山法ゝしのもしたりよ椎の木なたよとりもさこゝかも
椎の木居とは栗の木居之栗の木居と云事ハ椎の
木居と卜事之但椎栗同前乃後のゝ如此書ハせ

らるゝ所いかん
さる事ハ今この狩を近られて手をむかして吸る鷹ゝり 例イ
鳥ハ者ゝて鷹ゝたつるひゝいの毛ニ白物ゝしに為を取れ出る
然の毛とハひゝいの毛之鷹ゝ此公於時立る毛之鳥なく
て鷹俺て家の毛をたつるゝ云後之鳥を立ゝ事よ
よせて立るゝ以ゝ家とハ此前のきもの毛のこまりれる
不を云とこ
狩衣さゝ此ハいゝ鷹の毛乃 毛イ たまけハ人の言ぎ者とも
たまけハ尾の名之殺付の毛ゝ下のかさゝ之狩衣とは
かりよ出る時の衣之
鎮袋よりれりハさ出る古 書 をさ鎮さして刻なきこ方ゝ捨元ぬ

忍ぶろを人のうえ法かはまゝ也とき鎧を入ぶらいまふ
事之鎧ぶろまいるをいさしとこ立えむし源正頼(せいらい)に小山
の道ま女を思ひ出り望へ出る海波女のもとへ行とて鎧袋
を法かしられ女雪の儲をしられ有時忍ぶろを法かし
てゆかしして鎧袋をかりこれまは法かしられは女いく
なひらん

打たうしましろの雪の鎧袋をきゑ忍を法てうへしつるかな
と詠してゆしられはこたかやうて死られ給ひ大幾
ふく雪まいいむ事之初代五文字の心は妻
身なうこそ哀まれあり狩ま出て山へりせし屋にて成まき
りまくしく寒き狩ものれは雪の鎧を法さて在はゆるかな

風もなくて寒られはたかの痛むこれもたかとは
雪病おもしい業を鎧事之れはこと云ふ事ぶ風也
鎧とは鎧をひろけてこふ鎧さゆる事之力のなき
まよわてたゞ身をかくまゝ之

加里俺ぬもし雪つきも同まつ忍ぶは地ふ山おさる大たまもれ
はしたかつきとは法ふ神之ちふ山とは故ふ山と家ゝ
ちかき鎧之夕ま友なとま時乞してちる鎧之仍ちる夜
とも申之

たかは法ふこと鎧の家の材所夜志ゝ過ぎもひさしかりけり
昨るといひ今日そさ私ら狩ふれぬおもけの雪ぬおくよも私
おかけ若雪之当年の雪之綱まかけてこれ故当り但もち

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158

ガラス使用

振舞へいたり出ていたとなる之
健儀に志とてこありと聖に進て始りかりもの家法とはせん
こありとは志とてのとくにはおつてあり為之
あるに出りおもしろの小鷹の聖に於て神と聖に寄れこれ
折つけに居て大ことなかりかも山口しなく鷹は出たり
折法にとは居りて同事之かうまかも出に入とかむ出之
山口とは山口の神をいん祭て大を入ば　神を
祭法之
あり物に相聖ゆりん小鷹物鶉の床は法ゆふくとも
うましさよたて下聖にこれかひぬと年初て法ふけるか
一聖とは一度大聖これかへとは始て鷹を捉りこ

鷹呼（さけび）の教や詰んに鷹へのむかひの最に上をさしてけく
鳥呼とは鷹たては鷹にくと三度に以て鷹とは
鷹のゆへき山の家に入をいまて鳥たかのゆくことを
以て見之　和或説に大例か二度鷹にくと云て後せこ
か一丁名鷹にくと云合て三度と之後は見よくと計之
のうまこれぬ雛のうれも衰かりかり枝なしまて山の木葉
かり枝は将の枝之鷹師は笠の端となりしてこれ
切かり大例は目のとなりにてこれ切なこ
電仰きて聖の原はみかりたまましろの鷹は面かりぬる
ましらふとはひとしく白きこましろとは眉の毛にて
白きことこ

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158
ガラス使用

こゆるぎこねりさきたとはたねたねとてきたのねを
うつ右のねをうけ事なり
谷さしは鷹を合て家へきたよひつけてもしる待人
のはかへとも鷹は鷹をもれ鳥をみとるか何れ心にかゝれ
はれかへとは鳥のたつかと鳥に事こゝ鳥とるとは
鷹師は志るまゝ鷹をもり見付るまゝ
口待人鳥されば若鷹山かへりなりひしよりまゝ
也さまとは山まて志けく毛をかへて年をへらる
鷹のみ子黄鷹は南年のたかなり鳥にてはたち
たるこ巣より出て子の味よりこまさまてはたちたる
をは巣鷹とは山之南年なまとも若鷹とはやさまも

をしまへはこと立ても見こゝ分まこうこの待れは雪の曙
宇多鳥ハ祐州也
主志らぬ鳥されば若鷹山かへりはあふみちは日にさまをぬる
鳥禰とも云こ若鷹は巣鷹とをくとこ
まけ鳥も落ぬるゆゑ山の雪にたまぬ山の雪のあさ風
あさ風は隼の美名なり漢は晨風と云なり
霜なる宇田の姑鳥の花落ちのかはなりぬ山かりのこゝ
山かりとは山待也
口待れも若かたゆれば松元まゝ世の日次たてまぬいや
松の枝に鳥来を付るは冬こ
たなさきの角の柱にかはりてやはこしのあに雪の立てん

たかさごといふは左之延喜の御門の御時鳳輦の左の柱に
立て御輿の内にて鷹をすへさせ給ひしより此の世まで
鳳輦の左の柱に鷹の左ハ手にすゑ右ハ着る事と云こ
一本二ハ左の柱ニツのけりすゑるとこ
鷹枕ゆふへの言の葉とふのかきれたる哉のこゑ哉
やさきよハ霞のうちにて色の江鷹をすへ也定本と
たまかといふ鷹たぬきこと書と云文鞴と云文撰
ふおり東部并之造作寸法の法あり
氷室山ふもとの柴の小鷹かり四面むるかさなるくれみな
秋風にたなびれのかいるけ鷂袍吹かへしますらく色人
うけ鷹といふ馬にて鷹をすへて鳥をたてゝおとすの

ことなり
冬過ぎて秋の小鷹はすゑかりよとぞぬひぬる狩装束の下紐
菜とりといふは菜とる人同前菜をとるこ
鷺なりとてふ鷂たぬきなるうけて其詞を又定もなり
一よなよなたかゝりの道の追ゆく鷂なまさる小田のかりつめ
鳥ならぬ鳥の数之一よまとは一合せ之一よまに二よや
十よまとくとよなり又初めに大鷹をあつけて合わせる
数とよなり初め大鷹のよの数とはハ初て流行の
かりつめとは稲をかりてすこし残りたる鷂多くあ
つまりて喰をつ兎の鷂くよなり秋之大鷹よハ
あさき詞く枯野の鷂之秋をうけてよなり同小鷹は詞之

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』　請求記号 862-158
ガラス使用

をのか上に鶉のおちぬれ屋んたてる落ち人をまねくは
おちは鶉雉諸鳥同事之
もし鷹の末世をかつかり衣たるぬまうけり荻かむすを
同前
秋はなをやまと荻女郎も鷹すへしとは世の名
ぬりやまたちとをかけ鶉一ひろこは魚をいひせしを
やとをるく事前にあり但萱にむしはれてあり
無ら神なり
雲雀たけ世の志荻ちかり衣むにすりとる秋のすこなり
是鷹の子をはらてはれは秋はふゆへに籠の巣兄鶏（コノリ）
とはあり鶉の史之兄鶉児鶉とも云之

雪のまに物をてはり江鷹かり如雲もふ志業なりしも
物ふ鶉鳥まさ夕に子くさ物さしとて雉の物を物
に胡に持たてく合る之
童も遊もまく太いれぬ法を鷹（ホテイ）者とるをとい諸知する
者に落てをまはしとは遠もまりとい童ふり
有をはあり
笠の上に上毛下毛をはしをさて名の物も神祭つく（なるイ）
鳥をはぬまも鳥のこりしろ毛魚おもひを以下毛
とて尾の上に志ことと云巣のはしく物毛をぬきて
山の神を祭る事之雉に限らず大鷹小鷹いつ
まもあり

氷ゐる雪のうちは名雲にひらはたり法の谷川乃水
狩ゐるゝ蹴れこの出山に立殘れ土ゑ折まいつ
出山とは山のわたりにかりて出る之鳥たゝれハ
入出り入りまゐれて海之上をしけく折まれ出之
むまふべき谷水にわたりぬ雪をくさきて鷹やかまし
鷹鳥を生ゐるゝに水をかけて鳥の血乃くさ鳥を
失ひおづきを鳥之イニハおつきをさゝしてあり
空にしてかなくゝ落しかたむまハ名所の毛むまハ落つ
鳥をよかけ鳥りに落まいしるをかたむるゝ申あり
毛れちるを毛むとゝ申之事に鷹同のかしらにかく海
事なり

山ひこそさしてふるまかりおかりに落し祖の言葉に鷹おかりつ
おかり落しとは鳥を鷹見にておて落とゝあり
犬飼の毛風りてわ狩ニ鳥をまゝる鷹れいりてハみる
犬飼犬の振舞をみとゝ鳥れおるを知るゝ鳥をもく
ようくと云之鳥を風るゝ鳥とゝ申ありいるてハ怒あり
志さゝ鳥をよこさ海に立まいり（たてイ）さるれかひに鷹れよりて空とる
空とるとは地に落さすしてこれあり
落ゝ鳥を東枝とれハ生へ狩てくりに鳥れぬを左進てわ
犬法なく鷹ゝやこぬと他の狩に来とりれといふ意とよむあり
犬法なくといふ鳥ありと犬の志るすゝこと鷹ゝやこぬ
とは鷹れもやうこ犬と鷹とにあひてせむかこれて

本にあるなり

言ぬつき雪をいはれは家へ行て切雪これむ今山なり

此哥ハ本にある鳥の事と雪を並て本に

あまいさらまほるとせし然西の雪乃言をもくと申と

本よりとひく村と落ると申と本にあらひてあまいを

言にくし花て切鳥ハ言風をはれハくゝ申なり

あらハ花ていきするんあら雪の夜の雪ハもし里のひぬる

あらけるく巣におとして所をあらはむと

申なり

尾の中にさひいる雪に詰まてを雪に落ぬる

法あらまてさは近く花なる事とも渡りハ落にあり素に

入事なり

此ひ風らしあまこ夜の雪の雪の花を左まて水鶏花をなる

のひ風らしとは此ひ風ることにひ雪の花といこひ雪のねの

叶をさるとくよはくと花すること

和あけの霞乃うらの遠を雪を志ら尾法ハすハおかけ見ましや

白尾法く事と一隆院の御宇行平四将の雪古山を

おりひ出て鷲をあしかりはれハ源正頼の上の尾二さまて

白さ尾まて継はを雪の色の上の白さを見て其を

ゆとまいまこ雪の名のあり御門御本霞の時正

頼の哥二月乃色上の雪ハ志らぬとも此ハ世ハ

鶏て古ゆくと仕事なり此此より白尾を其継こ

能く志染をなくまで山風にまこれ鳥ハ鳥を定めまと
なき鳥ない鳥とて有同事と雑の鳴を聞こまよく
鳴をあらして鷹の子と云物を鷹に付て鷹のなるぬ
様にして鷹をまことよりて将立て合せると鳴をまへ
鳥とも卜と称鳥かりとは早朝に伏せる鳥を得と
ない鳥得ハ時をいはさるを
鳥東の志をふミ落るかけ鶉たあらまとさ鳥に遠立て切
其外野に相れし気ある青さしハあらさ里せハ落をうんあしや
青鷺（アラサシハ）赤鷺と卜て赤ハりしろハ青之あかけしハ同赤
なり鷺（サシハ）ハ其鳥より鷺之巣鷺の沙洗なし
大の鷹しけるなりて得鷹のなかやなまに鷺れ為ある

喜見ん鷺ぬまを立鳥に合せ法や家より屋に人よはふれり
ぬまを立とは人にそ鷺にそ深遠て鷲をたけ鳥之
霧分る秋の鳥聲の小鷺かり志ほり袖ハ萩の花をり
もし鷺のこそ法ち志への一もちりとるをさらぬを面白の様や
こそ法ちこえとハ家を鷺と鳥とこなこかれこへ
花越の袖こそをあむ樋の越の様なるを喩て云り

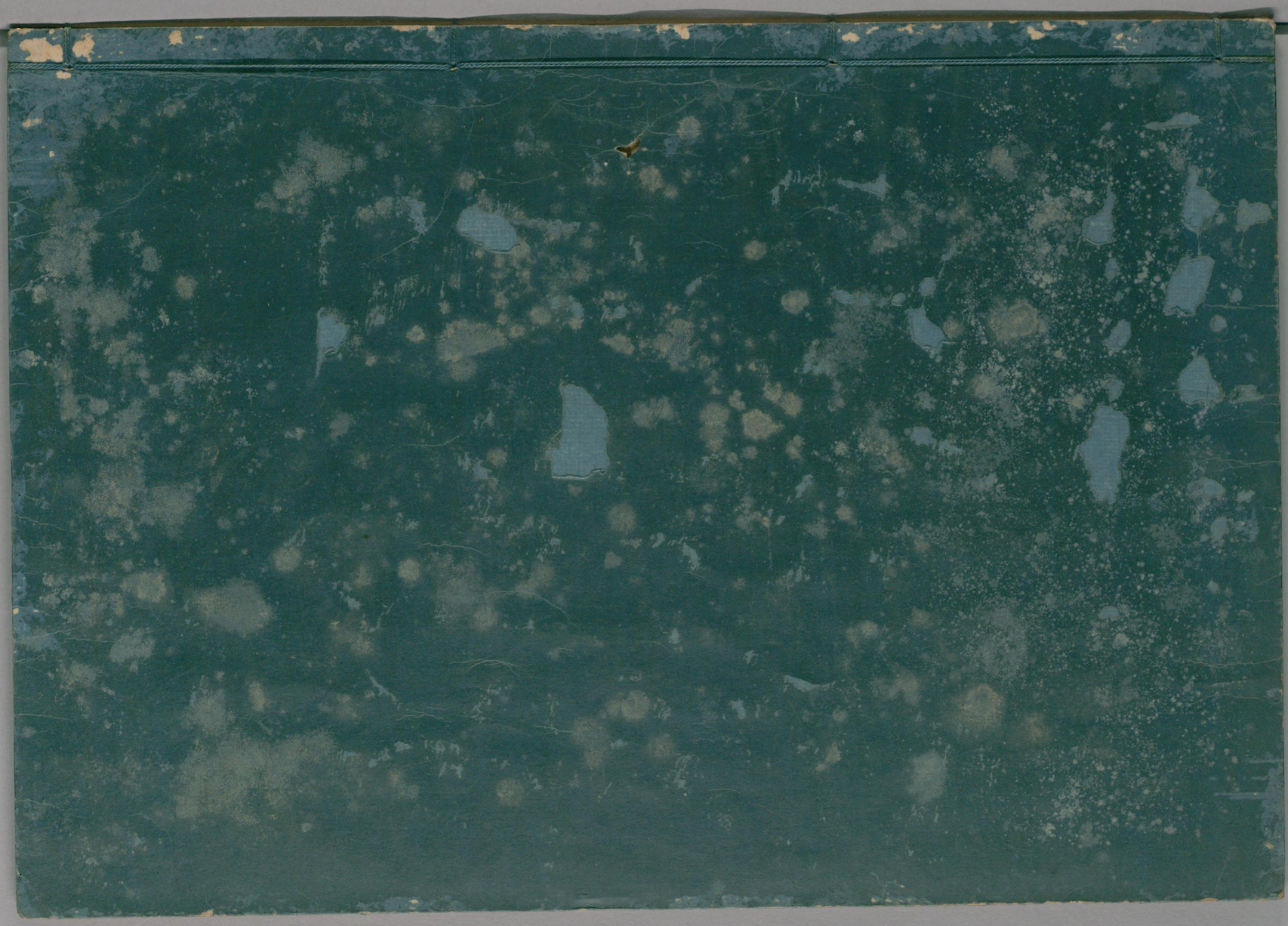
寛永拾三丙子年正月日

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』請求記号 862-158
ガラス使用

862
158

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』請求記号 862-158

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹百首』請求記号 862-158

ガラス使用